



0 1 2 3 4 5 6 7 8
5m 4m 3m 2m 1m 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 JAPAN Tajima

六
3121
5

能亭大人のうてい おとこが、はせ大人はせおとこと、人の連れんとらげ、
まゝ和合わごう今いま。大人おとこが笑わらて、空そらを集集め、消きなす。
轡くわ海うみ底そこの妙めうと、空そらと笑わらう。後あとの波なみ、
とよもよもとよも。空そら茶ぢ先さきは浦うらよし。
古今こきんの人ひとは、すゞり。大人おとこの懐いだ満まつりの狀じょう。



牛うし七しち偏へん人じん今いまの名なと付つけお放はなす。錢せん
毛けをすくし、寶集ほうしゆ坐すわまと金かなとがく。先さき美
膳ぜん厚面皮こうめいひ一部いちぶの耳みみありて、少すこ居ゐ候まつ肩かた
と重あますりて、笑人わらひや和合人わごうじんの妻めや金札かなふだ
あらうるらうひり、尾び小脣こくしん七しち偏へん人じん鳴なま候まつ我わ、
一いっ身み姿すうトトすう産うぶが安やすく、さうの袋ふくろををと擧たて

元もとの辭ことと力ちからをもつて、相あり、腰こしと後うしろとゆ渡わたす。何なん
挂かやらうるやく身み五ご偏へん先さき此こ亦よ是これ假まの大だい
尾び毛け少すこ滑なめらかて、吻くちばと天あまをを見みて、干ひ
さされ乾かわ魚うおと喰くて、ふ額ほづらのけと拭ぬぐて、
此こ叙�坐すわととある。

東都 梅亭金鶯編次

青柳檜うき能樂亭より相り參りす茶目者虛長松

下をゆ躍助ありと主人喜びゆとぞ又に社源き秋

の日の雨さくわくうり坐そ人のゆの淋しきより又入村くる

物語小大ゑと驚くと老らぬのとと既小ものを夕暮りけづ

一番一もんと頃くにもや怪談をとけよ、一もぢ残る炮火

と大島が奮ふあさりけぬ大島、を海ねども湯く移さる
籠のあふすまうて、のまんとくとも轍向い村に國
累きものうちふる人のみのこも竊々行を横て行と
ゆかび大島へ轉てのりの癖、「オホシと嘆をする相子」
忽地ありて吹流せば、「ハツミカヌ」と詫えど詫方きくものま
そと「ち」と處亦能を繕め同むうりむちくさをうづき事と
あやゆく「さ」生揚ふを寿の鐘の淒く霜ふすがまほの手さと淋
ガ「さ」りれふせよと生と付ての脇病のふく御悚がつるぐ

ヨモジト云々膝の先を徐々逃出へまく此處ら書
つてゐると又あらと探つて云々手先に障るりのもを
シテ「チャ維也居候」ハテナ今ま此處ふ尋くのガト經へ記
シテおどるやど程々底勁味極くありすと云々一聲言葉
で「見さま候ゆ大人」と申て肆然ハリキ魂魄を食ひ
壽命の毒シテ大いサ應答をうけヨモジト云々と云々と逃
らと奉と小探つまゝ見ど只毒と考へまりて人の窮勢
のあざれぐまで此處小居と云ひのうに根と食ふつて

とりよ一怪むせすりあがみの先定リ亞ム一發不_レも只ぞくと
病シテさむかようあそたゞとくある事シテもあくちの場ヒと逃
ぬさんと、即ちあきとてお先シテがどより逃まうまいり一膝
軍事小物シテあがみの種シテう馬シテをほじきひす處らとゆき
トおまく探りまくと横シテかくぎくらりと隠シテから
紙の引手の先シテゑみやうと息シテのまゝ壁シテにあはせと紙
を突シテとシテ方シテ此シテ方シテをよほど多シテ紙裏膝下シテ歯シテ根
り合シテぬ裏シテ声シテと「モシ森澤即大人つまく一やうくをる

のよき胸むねが悪あくく痛いたんであつてはままくと呼よべる
より更さらは魔ま毒どくのせのうう自己ちみが声こゑをこゑとうへ聞きく者もの
ある今いままでと異いなるやうに思おもひだり「ア不景氣ふけいき」あらう
さうと肩かたの訴うそへ附つく暮ぐれー「併あわせてもよほ枯かみ名聲めいせい
みをかみをか小長角こなげつの車單くるまく表あらわすとゆうとゆうと
逃とう出でん天あま憲けんの先まへを仰あおそへ仰あおそへ天あま憲けん
冠かんむりあわぬ「ハシと身みと魂たまも消きりとく教きける
うの身みとまどろくとゆえうきりやお端はたどまどろ不景氣ふけいき」天あま

窓まど手てを握いざなり探さつそると行ゆく務む事ことを入れ重おもう器き
をうちわうちわがづきしよとば現あらわし不落ふらく天あま暴あふと醜うい務む事こと
が途と中なかと舞まいひ良らうの柏子はくし不裏ふり「ハツシヤウタエハツ
タシヤウト草くさ芳こう不裏ふり」「ヤクシヤウタエハツ
窓まどとくとく向むかむ打付たたき「ヒテと後あと」柏子はくしれどぞと
つる籠かごと打う付つけとまとも仰天あおまつ一ひとを怪あやま處ところ不天ふてん寢ね
をすむ忙愁むさうとて警けいえとひが聲こゑと恐怖おそれと手てと脚あしと處ところ
らと條じょうと探さつとよまと見み傍そばの押お入いとあそび處ところ

中陰と小糸のあひどく天窓を突て天窓の先で小糸ある
雨絆を引うるゝ一絆の中身は竹やうの筋と天窓うす
びらきのじめうすく少く高音で「イヤ次の筋」と呂つて
送りへば起はれのゆゑ道理で声づ可怪くひづく
升ふとの音節いわく「さうき」
手揚りのと指へて小妻の音節「ナ。チャ」天窓うすう
う五音ぢうう音節をひきと探りまへ「やふしても
ひぬへ被ねと送ふとのう天のが助毛と不吉物の陳家

ざとや棚のゆくもひかりと進入て固く縛て繕ひうか
びりやり隔紙うきうり鼻とこうして唇とじだふるや
手と歯とねりせんとお枕とま教程ゆつま歎を強さんと
手からに込と機採まだ縫のゆきうる柔らきのうまねて
下げて色あえりやうれしぬねど外とて天窓のうう餘と
冠り風ととくと浮遊力とくわすとくま対義あ
森冷ぬちやん人のうううううううううううううう
びまの道具ざと手と顔を擦へ一軒とくに落し才く化

のまゝお繕つてあるが遠くね
くわもやア社れ
「ナニヤ 最中来とソ 勢イヨ妙
霜け未免先づ さへ一故の二肩入道も化粧ざる面
白ト五人前あり其の仕あふ縁合ひをきく裏
間の事とありモ「サ主人四窮小四在みとらうすうと
り走る。植家主の源氏もあひて「イヤモノ萬物萬事と見え
る様り此先劫まじ歌声がちと音がト搖打歌と
聞こえまし「今ナ茶碗や煙草葉シタ調羹とぞも入

也此處すありと。ハア御の家代りをすが、斎場もねどと喰ふ
禮とのごとくえんがえらはまうめむれりと、とてえヌリとお
まふ坐安行をするよ。拂り、邊城を踏みつけたりとなせかと
ある。ドレく拂つてまよを、番とて度をきく方一物の
食残りを、もと、齋小拂てある。もと、也。ヤシく、齋小拂の
者と蓮葉衣子と團りまと、提灯の灯を引燈へうり
たまうと、其の歎へ是の物語と聲エア波の高いの宗祇教々
あい地を六筋入生と、是と、又無事と御づぎ御處の事不

也。りの、方一火の用ひもあひ、ワト小手もとで、行燈と靴
と自らが、揃ひ、イ提灯の燈と、ラと、映消し、安への上の轔
度と、ナ煙竹を、半一人と、と、薰らせる事。ナ船の
うち、又、被衣、衣と、身と、もうと、繕り、替と、誰も、御船
と、舟を、あり、行燈と、りんそ、の、密室に、少く、い、意有り。
ナ、袖、衣、ゆう、人の、の、声、い、ま、も、あがるや、密室や
意有りの、生、あ、と、人、不、津、り、と、あ、の、の、シ、と、あ、の、不、津、
ゆう、袖、衣、ゆう、人の、の、声、い、ま、も、あがるや、密室や

一ノ日小移、二ノ日入た木免外道青鬼と化きの猿らへ出来
あひば茶や一ノ日小移、出でけうる金も僕はとせま
り重トま猿のぬき、下冒げけの備物とテ湯瓶へ少
ねどわ茶を奉る者へおてぬき茶などと申の事は無
げ室へお行ひ便人ハ湯方立つて福敷あり候と申ゆる所
也、茶子小物立づきて居候
也、庵あらかじめひ小車へとまを茶や、行花と申すと有
る事、傳下知承も又御どなア茶や、モレヒ引りセ替

とおもひやア度量がふさつとてへ居候へばど
嘉次よ一處よ余よも一ト馳向のあるのぢやア也よ 茶ち「亞あのうもむかせ
故ゆゑ一處よの、免めんもあれ駄たままでふもきりのと構くつぐぬつもつる
せせナ茶ち「虫むしうけきうけき、虫むしうけきうけき、虫むしうけきうけき」を花はなの花はなのみ自己達わたくし先さき
頗やうらぎとおもひやア也よ「とアスアス、此こと、身障みさうみともう
が重おらアヌヌ、キモキモモ、左さ前まと程り度うもああきき、「ごう」
もそ居ゐて、身みども見みると體からだ也よ、虚き空す、ノゾヒキノゾヒキて、塞ふさう
ええ、ナ基もとや、やきみ構かつて、坐すうて、足あしも、ト腰こしをれれども

あまくと櫻の枝を歩行す障子の枝へと引掛けたりと明て食事へ送入被物を突りて大至とを
御深き湯が垂りあんぐる鼻の先へ敷う棒に茶庵を表
つり茶也「お客さんお茶をあアゲれとおさづをとべうりと
生とおまよど此家主の深き湯ハ卒忽きび持すとあ
は一向不動が付ぞ「キヤくお守りとおまよとお湯
お家に在ざりて开とお客でもあやあまの一端者
イヤ端端みどり及ぶらへとりどじ方も例の卒忽者向ふ

の衣端ハ草へ送らば單く変化の姿をうせんと能振
そともちうと通つてよてもぬが付ぞ「阿小森彦え
今秋どうこの外でむね他所で囃しの茶番の世音收
モ情それゆきう毛難もあさんふほ苦勞をうけ
けよア旅也、縫とも構へて茶間をうめくの先へ
頬つむかへ通ひて大声を「りとくとく」と牛の
叫美妙とある天音をうりへろりと音を響かせ源
まゆい時もまたうそて「キヤア」とおさみ兩年と仲一生

奴令茶目をうて胸のとどろを突のあせが不意とおも
て茶目を、茶を養ひ茶のんを投り牛一軒向さぬに
筋斗障子のとどろく鶴がるや茶障子ハ外と毛障
毛障子と泊方此方へ例とふと後邊ふねのまゝ御
ある二ツ目入道ま鬼みぼく外道の變化も起んじ
跋うり所がりとしゆがく白眼まびぢらでも元の一ツ目
小腰の筋ひがざつくりと寛んで動けぬ源吉湯かれ
再び「キャア」と声をこす處へ毛のまゝ頭側くら急地

生れるとじゆうとま轟きゆいもとまくと狼狽あはる御
へうけうり「サクムダガ猪口」と「イヤアー大喜び頬例
と驕とまう」と茶めそニ語らむ眼本のまゝと顔例
御あど「トモカ」福さんとまうの歌「トモカ」をとせと
使舞はれと連呼のまづ掛り人をどア故、チヨツ世と殊比
男の眼うんとまづさずと日宣示、物の動いたりも
方あがめりア森、物舞してまづさずトモ駄町を
吹きとバ宣ひまつ「草木」とちぢめアをめ「トモ

とせあと生辟きみるふあくらを振めうむ智アーチ
棄スル大カの声で呼スルてよやうトトキスル支シテうち姿マスクとすム
ぬヌが付スルトトツ月入通スル一月子候木兔ウサギ鬼外ガイエイ
通スル化ハシメりの小夜ナイト衣被ナイト赤レッド金羽羽ホウジとせくるまを
もモさうと虚スル呑スルれい脇アキラすうり茶チャ破ハグへあと汲スルあり唐
毛モあくムク金キンぐす銀ギンふ銀ギン銀ギンとんみじねミジネを面ミジネへ吹スルけ
墨モクア一中シタチ翁オジ不放スルひ遠アリトト吹スル五ゴすうり麴クとふそ物モノ
りあアみミ渡スル虚スルヤアア一深シタチの家ハシメり
ガガズズ

さんざ家アリヤ守スルさんざ森アリヤ十三深アリヤの家アリヤ主シテさんざ一連アリヤ
家アリヤ守スルさんざソトアリヤ一物アリヤ紙アリヤと此處アリヤ不居スルとアリヤ一連アリヤ
の所アリヤ代スル不居スルとアリヤ物アリヤとアリヤ一連アリヤ次アリヤ化ハシメりが義アリヤ統アリヤの所アリヤ代スル
不居スルとアリヤ不居スル一連アリヤ行スルトアリヤ大カ強アリヤ勁アリヤとアリヤ大カ吹スル牛アリヤ
ヒトアリヤ行スルトアリヤ筋アリヤ付スル不居スルのイヤ拂スルよ少アリヤ辟スルの引スル生スル一に春アリヤ
肩アリヤ葉アリヤと静アリヤ切アリヤ紙アリヤ五ゴすムちアリヤわアリヤ一連アリヤ一連アリヤ大カ吹スル牛アリヤ
大カ桶アリヤ桶アリヤとアリヤ大カ桶アリヤ不居スル戸アリヤ搬スル人アリヤ只アリヤ船アリヤと持スルよ

隔紙あけんと川手と持ぎまわりて川漫てもざらぢう
支へて身の由道理子柳のうちかへ波太鼓が今原喜作の
倒とどき声小物り竹天一両手と伸一隔紙と一生鑑
今柳へて席とゆ効されば森次ゆひ森不放て推て
りほくすとも能さる隔紙不棄一茶目さん下さん手
候と川あそく異なれりほどまへて些りぬれ一茶やもと
承効どソラ川漫とトモと一所ふきらすトシ人
と度不隔紙の揚へ手セウナ川めまぐ大島り新とまもと

歯と口もあらず一生殺命辭の手足で押せど力
つまむと死ぬとひとまどらとる隔紙の内すりねうと
顔をぬき大島へたまむ國神と例とて冠匠小妻の翁不
天窓や故い勿論の肩うし脚へまじゆと篋のまくすち
妻名ゆきあまふ、おさる千鶴の東にあるとお寢とて
毛家せりづの粉他職へ拂子とあせらるてさりと妻
のりの身元を繕りて彼方へ逃れさんと下船のけより飛
牛と大虫うさみと飞するよりも妻店ゆく茶目表下太鼓

一度に「キヤアッ」と腰と接するまゝを以て平伏の大虫も外
さん毛どりの目小僧外道の變化もと木兔の化りのに
本多の歎をうながすのも因で「キヤアッ」と顔例に人の唇の
声不覺き此方に漏れず虚失松羅助へ仰ぐと云
あづま戸船の例へ體を下すと、喜名ゆ奈月夜下木助
がさうさうを處へ尾悔つむじと仰せらうとめり眼
さう散眼と光らをとすと仰ぐと指さすまゝ教
虛失のウ不葉死本眼付とくと根は沈振ハ
虚失のウ不葉死本眼付とくと根は沈振ハ

虫が好むロ波の圓とりよのと卑く虫と仰せむの
う物と叶笑ふ真似をまむのと、さうを處ふ例とする
大虫が足と脚と嘴と噛つて波下チャ物と魂の口と後と
うもと照す「波」維持處に海と力のそばぞりと
之を離れてとまると此方の虚失松ゆ「ホンニ物ね」附
之を离すと二人の例へ立すと大虫を起し御まつる教
いがかりに取とこむと小蟲の務めと干枝をとおさ
美帆にうながす画が死絶あら折らずに毒と申す

う眼とまもりと二人を白眼びくろもどか虚長松ゆ
政助も一眼みまつり「ニヤドリと声と一度に渡方へ筋
糸物子に斬り道助の手先で倒す」深き鶯の聲の
あらと笑あらと深き鶯忽地正筋替「う」といひ
詠えり竹の葉をもじりて比び國章、かみあひと立
より往つての一生無命表の方へ逃ゆ

○あすまく御殿にて赤八、今朝もぐだり一人と
173海の海年より大附がり年の元除大附、あ強も

さんと出行一、秋の日脚の經みかふ雨さ、折々降出れば
通の行とも散歩ぞ、此時漸く晴りあり一、近機場
の高吉尔、せんと草木と、赤「自己ア生ううけの方」
と、遠たへ出で雨下降れるとおびに被て表に強れぬ
と、何方う宣、一、何方う宣、自己ア表に強れぬ
と、被ひ不被と、一、被拂と、自己ア表に強れぬ
と、おもむり表う、おは、おは、おは、おは、おは、
味とまどかう、のサ世、往来のりのふ波よると大附士五

のことをあらわす。さうして
此時まへて車外へ舟を
けりとせし。まへる事と車外へ連車、いはれ
さん。の事に集つて居たる邊へゆく。車へそよやうにひづ
ゆゑむ。御法でもかれて居たる邊へゆく。車のサ。一自色と
あれど金を徴引する。どうも奴も隸奴も不候を可
て。まことに。かくして車を車後本道の直ぐ西
へ降りてゆく。車をとぎては躊躇せず。急いで
まへて車の外を歩き。まへる事と車外へ連車、いはれ

物をうかへ難向て自己達も一筋不被^{ハシ}道^{ハシ}と義度せ
て是の見え^{ハシ}船^{ハシ}一筋の運^{ハシ}也^{ハシ}死^{ハシ}不^{ハシ}され^{ハシ}也^{ハシ}
あらア可^{ハシ}怪^{ハシ}也^{ハシ}。も^{ハシ}薄^{ハシ}ア^{ハシ}と^{ハシ}被^{ハシ}根^{ハシ}も^{ハシ}一
さう^{ハシ}特^{ハシ}良^{ハシ}也^{ハシ}。も^{ハシ}一^{ハシ}之^{ハシ}と^{ハシ}又^{ハシ}本^{ハシ}に^{ハシ}義^{ハシ}
飛^{ハシ}也^{ハシ}。也^{ハシ}ア^{ハシ}け^{ハシ}と^{ハシ}一^{ハシ}號^{ハシ}也^{ハシ}。も^{ハシ}一^{ハシ}之^{ハシ}と^{ハシ}又^{ハシ}本^{ハシ}に^{ハシ}義^{ハシ}
ま^{ハシ}相^{ハシ}本^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}義^{ハシ}。ま^{ハシ}「^{ハシ}ア^{ハシ}在^{ハシ}於^{ハシ}之^{ハシ}守^{ハシ}住^{ハシ}の先^{ハシ}
ま^{ハシ}「^{ハシ}ア^{ハシ}「^{ハシ}モ^{ハシ}ア^{ハシ}金^{ハシ}を^{ハシ}替^{ハシ}エ^{ハシ}。多^{ハシ}金^{ハシ}が^{ハシ}也^{ハシ}
ま^{ハシ}「^{ハシ}ア^{ハシ}奪^{ハシ}れ^{ハシ}と^{ハシ}思^{ハシ}ると^{ハシ}嫌^{ハシ}也^{ハシ}。多^{ハシ}金^{ハシ}不^{ハシ}惚^{ハシ}られ^{ハシ}と^{ハシ}嫌^{ハシ}也^{ハシ}

うの娘へとおまの娘へ渡つりりかて來とひども宣がむおれ
大リハシタク妻をゆの家のあまで來りけど、鶴門は不裡て
望ちく執ぬとと、唐揚わらう肉すり松子と瓦松枝にゆす
安ててる源を浦が竹むき野とて、唐揚えとび海すり鰯食
にかうて案あられ、鰯をせあほんのあく魚ひもひる鰯
鶴(鶴)とラツキリホフナ(雅)アイタム(赤)アイタム(源)を浦(ミ
おとをせだ源のくもくそかせひこけ。

七偏人五編の上終

林話妙竹七偏人

東都

梅亭金鶯編次

のらもとおもとおもと大師の家(の)夷(あ)
のらもとおもとおもと大師の家(の)夷(あ)
亭(の)あみ連中(の)君(の)今(の)川修(の)性(の)を義(の)とやらん
もとと既(の)森(の)ゆき森(の)あまで奉(の)れど、鶴門は小(の)子
を連(の)めとすすの前(の)格(の)子(の)あまで奉(の)れど、鶴門は小(の)子
源(の)浦(の)小(の)突(の)とされて、鶴門はせにうちたまづ、外方(の)顎

お筆へ集り奉りますと筆致みずく次の房の隊子へ移る所
船けばともあれ船底へ大備燐とさりとてあります船うきを
審事は「テ何ゆきあくらにと隊子の元と嘗ひしきの年
すりすりと毫をうそとあら廢什しきを身致ふ一目子後
日入た本舟を免下たの變化もと天窓うき付まどとま
向うる化ゆのうりやう遙つて又船のあひ例として唐まど在
けど、「アソトをうり下仰天へ逃出さんと應と同は腰の
不人形せうと竈んで此よりまれねが。アソトと虎嫁つる

眼ぢり散眼とさせたりとやうくのひかと度ぢり出捨す
の外へゆうよう早く船底七ヶ手を揃へてせこふひと揃る
ぐれおともとせん延出へぬ「モ先むとすんと方舟達れ
きつむくれちやア見サ浮雲とあく。モ、散船ぢやアリ
ねへ。モ、船へを行ひて時をとひつぞう元年で在水ぬが
家と稱さへあまうへ化。化ぞせとしとさりととりと
船と先らを笑ひてうりと風づのうりとすと自ら切れぬ
のち程不直られ船へ腰ぢりおの方へひまことく走る

身の處かた「お前まへもんと。おうなまく、隠かくすひも
ひもとまく。度たよもあア、行ゆがこまわら」相あい「化か。たま「化か」を
てく森もりさん、婆ばあさんとあごあごと、ひきひき腰こしとひよひよ
うう「ちち、ちちけ」形かたち「イヤだ、だよ頬ほほを打うちり、あごあごを打うちり、
ちち化かのの」相あい「化かみ」相あい
ト熱ねつねねと、うるうると、度たよと、胸むねと、手てと、腰こしと、
身みの處かた「茶ちゃ間まを下さ太お身みの髪かみうれかとのくらくら、髪かみ

よ^ホーが夢かーござの。た夢さう正天宮^{アメノミヤ}もあへ茶庵^{チャモン}をえ
とやくみのとが寝て夢一ヶ月子供本房^{コトハシ}の初^{ハヂ}とえ
み眼^メの世^セの二^ニ眼^メ入^スたま^カが、夜^ヨは種^カ唐^カと、や朝^{アサ}のあ^マと
手^モ窓^カが、肩^カが、胸^カが、ま、ソ^シ化^カりの^ガ仰^カと^ス飛^カ^シと^ス
他^カの化^カりの^ガ嫁^カと^スわら^カ室^カと^ス、カチ^{カチ}と^ス飛^カ^シと^ス
カナ^カと^スきの、齒^カぐさの^カ石^カ不^ハ日^カ千^カ繕^カ子^カ懸^カく^シま^カう^シと^ス
ぢやアね^カナ^ホー^カう^カ竹^カと^スの^カお^カ、卑^カく^シ達^カア^カハシ^カと^スば^カ小^カ
弱^カが^カ、あ^カの^カと^ス、舞^カさ^カれ^カめ^カで^カせ^カ、ま^カか^カか^カか^カか^カ

高で野千、程の化とひどももて不毛のる。ちとお指を
れそすやまき、瓶やと程の裏の破約すやア弱い。まへほ方
とらのねび竹と篠田の森や森林も小津にされど、まれ
ちやア外岐がともまく支ふ森林も年連中もと化して廢せ
りのものねう一を選擇て長々とある。底腰のると云わざ
り色と一所下歩行なせ。自そどつて世十や程と効が能
キア忍ますりのり敷よみ下野千や程の裏の破大すア弱
斑木、自そと猪ぬ。ノホ小敵とこそ悔ひうるどむす處
べらず手ひの程の棒ぐわわとくろぬのとが勝ててからねと
かまくらく鼻根まく。一モトモくと他家の石屋建めり。す
竹の枝とち毒。サクもあひ殊の毒と見るせ。自色ハ
もあれのありと澤。サク。長家の行度ふ力根にて金不
勢とこと革とちやアね。ア「まだ手取弱のよと」す
己一人ぐの澤流してまく。今自はもひ滅法して法く柳の
葉。シ葉も一見の裏サク。未だまく。柳やら少鶴刻家をひらを
く真まうと先ふ五とあと床り。鳥居や門邊に集

りゆくうち行水をすうふれども水戻とす出し待奉
に就ひて手の平へ懸るをとみ水戻さげ梅子のそと
うゆを取れば赤ハノめふらつて國へく水戻で被奉あ
體もすと朝麻竹の枝で被平とすむと後へ三里あへ
下見藤とがく塵りぬ「サア来いはまの半方の道く
船もすとすう車とそばとすまわねりアヌツ身出
らすせやで些細の事と一見こちびて度り要ア
待くし腰けすり袋と身びと身巻をとものとが

天窓へゆき拂りつけ壁で眉毛をせせめうた湯せが赤八角
まこと筆筒をとみ牛糞も天窓へ拂り付壁で眉毛を濡
ふかとじにゆくからく干て所すめ名「ちやアツね」^{アツ}般
うさん。アノ、縁井やでうる卧枕梅の柄干を二十ほ支う所一
段下にハ継げれゆく「モサオホ」とうの歎一ウエ赤^{アツ}と
ど眉先へ陰成付とづは乾と仕方おおきく梅干の影
とあくべ右のううのせいかく陰成邊とまつどううともう
てヨ「弓サ兜畠」^{アキタケ}有るまねをとめやアリ森へ

仕方いしがねへあつ鼻はなで塗ぬ付けてあくくのへ行ゆふとゆかまま一人助すけ
大刀おほちがあるといけばとどきアああめふを腰こし成なれさせう腰こし
の身みりが魚うそととわへへさうが胆さう十じゅう程よの筋すじ爲ためざくくる
くるまくらまで想おもふ所ところと身みを付つけて夫め妻め一ひと緒よて守まる身みをせ
てをああく門かどの籍せき子こ首くびとつたとみ津つの寧ひ子こと守まる身みをせ
りとままと核かく也よとああくくののへあくくア行ゆを日ひ飛とさんさんう
化かのやうすと妙めうつと唐とうが先まへ進入にじゆて美うつくしきと
ままとゆ自じ身みアキああだり申まへゆきと此處こし不ふ情じやうと居ゐる繕つくり

の
のあがのひよもあり竹林がんぐても疊千や程すらも
の斑大のあう強いようとのウ^舟
左船へとけとど万一斑大
うちつまひのが五十七ともこれね
「チヨツカ船がくとく
と長んまえきめ下がくづね
舟^やもあも藤か腰の所が
ひもとくとくと素をもやアね
「自己な^{ちゆう}我^わお^うくとく
ざア^舟「アレ^{うも}家^{うき}の^う中^{なか}で行^はう^は音^{おと}がすまやうじ
小大魚^{こだいぎ}とぬあうと漏^{さき}と先へれと轍^{せき}通^{とお}とまきつけまくま
ト二天^{ふたてん}ハ櫛子^{くし}の例^{たと}えより舟巡^{ふなまわ}りと舞^{まい}舞^{まい}と洋^よ舞^{まい}

小界ちよへ、さりげに却後さのの隸卒亭の窮内くわいのへと移れ
まう祝めでは、大魚おさなが屋敷やしきをありきぬ小金こがねがうたを
平ひらよりとも、あもあも小腰こめいと殺せば大魚おさなのゆきの變化
きもよちいふも忽きのこし牠べ臂ひともすめとじきよされば、人ひとの眼まなこもう
光ひかりらせぬ、魔まの吸すくと、互たがいとくもう、魔まりも
骨ほねと、皮かわくと、が森もりゆ、戸と敵てきの、變化かげが、久ひく、そり也よ
すまゆ、此こ効こうをきく事ことがまだ、物ものうちかひ研くずり
首くびと伸のともとく、も倒たと一い變化かげを翼つばさてると、冠かんを取く

「モウ、あやういふ鬱鬱の氣をもつてゐるであつ
たゞ、何ふも見えぬ度だ」虚ろに手捨をかいて坐りと
放つて、お葉をそむけたまふ。「自ら西考へ狂言ゆきと
お見せしとお覺ごともおさへぬ。」
さくそく不審の門は參み、赤八し中西七左衛門と名す
「キヤアツ」と口を連ねる日乃姫やああ坤川被木鬼の株政天家
あらぬぐれ眼一度既のれ、そぞう初お祭りの御事と
おもひておもひてござつてゐるが、二人の繋合「ヒミト

おまかせす。金子の体へ近ちんぞう體へとおもひて、身入らる
道出でくわづ。本元の化りの娘子の内へりて、此狀
七日五日をうち、ヒト物りをあめぐるに、繩八日繩
「おまかせす。金子の外ふ隔離をも離れて、骨のめぐら
ゆきのよ道をもじりて、おびいざりて、身へ
様子がわざりて、あらわの舟をもうす。母の御のをせりゆうに、條
とあらむ。ヨモ天、櫻堂入門の御用おどりをす
よせ入るまゝ入竹林がて、藤をわらと編みよせま

かくとも候不思議と「やけあざれ體言」と起へいわ化者
の弱をもとより勢ひ併けとばせり。此等やもと起へいわ體
あらう一枚本刀を仰きとて椅子のうち退けり。と見えざ
まふぞけ。五右衛門からひの音不尋常とらひの爲て燐
春よどいと自合た。自子傍を免外れたのゆうべ入り主
體とが體を起しもととをへアソヒ。おつ天幕をかへ
迎へまよ途方としゆひづりの番やだの去写
をどよもとと學まうり墨、腰まく利をあり下り然大車

法うるを聲めの是をとて「ヤ起さん不思議さん」ぢやア起
り形起へウフリ一車へフハヘ。茶を賣りよと申出づと
よなうと「天寒うしゆと骨と骨とあらうて仕事」ゼ。體へウフ
ウフリ一車へフハヘ。森木「おとサ自己と身とヨ虚であんヌ
秋をとて聲あねとすみどア又「こゝの多モ也」百物語の
墓を金とのどく「ヤち自己ぢる多ア宜西のあみ手ひ
ぞく天氣をとくれどアと冠ア「絶縁」とは聲を響く事
へ陰を塗つけ度つて聲子被まると肅ハいも見えて済

あれ付へまりとももあひて通ふをもひのぢやア相手へ
自己ア裏手小町然洋一とアまどり藤もぢとを處ア
ちうとり止りや急が一森二入リグ物りもあひて相手れ
餘り甘く化さとひて大忍さんが目睹とがで仕舞とア
支どく下さんぶりやへ徑て著てゆきゆきとあであも
を小玉寝城。コツキリ押されるとを秋が松と。國者で
の肝どうと金をとこうい形らまく森さんの内へ一走性を
素そ長れども「森森不面白不承と仰ると飛るのび

大忍着きの森「さうも」母め「仁宗とお兄とて隼まつ
ちやア大鳥とす卑くりやと呼ぶあやう森古事記」と
景あもア五あとく母「飛よ」先お小歩行たま大忍
心こころちやア健けん也や「人ふうのひと重て悠ゆう」と
乗のぬながむすりの母「州しゆ四足よしゆつ」と仕方む大忍お
女め小櫛こじりられと縫ぬいひと縫ぬいらあま。ノウ森さん森「さうも
あが年と橋はしで自己じが到達とうだつあら森森へそえもとをちへかる
とわく林はやス「才さいがやア森森さん性せいをあくと二入りハ

森へ出りてより聲をゆき鳴鹿をよりて度ぬの方へ遡入
きりて篠ノ尾遠のれ今まぐれが付さる程よし化
りの旅とどろく素人不旅て体殊れし處とや體良との
事とお圖書とぬが森と肘とづきとりわせ虚でわ
ふ森と旅樹いざるりて本山のやう下木露を
むらむらゆき森小豆山のと化の付がりうる時より
いどけとど仕方せり生と付と通のほ馬子下木て
仕生をすまへた事大久保の向いもとをとすとすと

森へ出りてより聲をゆき鳴鹿をよりて度ぬの方へ遡入
きりて篠ノ尾遠のれ今まぐれが付さる程よし化
りの旅とどろく素人不旅て体殊れし處とや體良との
事とお圖書とぬが森と肘とづきとりわせ虚でわ
ふ森と旅樹いざるりて本山のやう下木露を
むらむらゆき森小豆山のと化の付がりうる時より
いどけとど仕方せり生と付と通のほ馬子下木て
仕生をすまへた事大久保の向いもとをとすとすと

情弓をあらび歸りきる時を起ひて門より「どう
どあつやと早あとひうとひうこじと是食のまを
と歎すとうが」^也「大神に紫りて降りのまざ
りちかむせりあさん此方へもんませーと目アトの
殿門ふ角字を廻て半天を巻くる寫経帳^ハ府下掛る
多忙とありて年どあれ捨こうと男^モも年四男也
も多忙とりか仕事もと摩訶^カりあとよ
書^カくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
「ナムカ^ル」^也「日月の軌道^トとみのと、義小
じゆうて事あと義^{マツ}り^ヤ秋合^トレ^シ苦勞^{タメ}で^シ往
いき^テ「仁^ハ鬼^ハゆゑと卑^ハく^ニを戴^カくよ^リ」森^一
虚^キさん^チ茶^の支^シ度^トと^レ兵^人多^シと^レ角字^の半天
と^レ多^シる男^のあ^ハ手^とづき^カた振^カる^シ此方^トと^レうつ
て^レ下^さり^シと^レ彼^方不^勝氣^無男^{アリ}か^ハ此處^ト疾^カ
も^レし連^て來^リと^レし^テ大^シ多^シのま^シ「オ^カ法^モ
九^ノのそ^レせ^カ、^カは^シ之^ハを流^シ小^シと^レく^ニ爲^カた^イま

ヤー^ミ「ナムカ^ル」^也「日月の軌道^トとみのと、義小
じゆうて事あと義^{マツ}り^ヤ秋合^トレ^シ苦勞^{タメ}で^シ往
いき^テ「仁^ハ鬼^ハゆゑと卑^ハく^ニを戴^カくよ^リ」森^一
虚^キさん^チ茶^の支^シ度^トと^レ兵^人多^シと^レ角字^の半天
と^レ多^シる男^のあ^ハ手^とづき^カた振^カる^シ此方^トと^レうつ
て^レ下^さり^シと^レ彼^方不^勝氣^無男^{アリ}か^ハ此處^ト疾^カ
も^レし連^て來^リと^レし^テ大^シ多^シのま^シ「オ^カ法^モ
九^ノのそ^レせ^カ、^カは^シ之^ハを流^シ小^シと^レく^ニ爲^カた^イま

せうが行幸まで日暮すまではと諭すと又つて例
と吾大意の例へ傳てゆき其の勢とて功徳との心を
いますざりし陰をと小旅まくすと様とて勝負と教ひ
せん馬へて支がては男の像と利多の道甚くやま松毛
まき毛木石板が逃へてともももとまくすとても様と
ゆと本へては通つて坐度にますうつてお葉ひやて葉あと
載せざる様り花傍を抜まくに余すと一日轍もでり致
さきひら木へ旅せんと之を後方ふ吹く事半程をと赤八
軒と金を拵へしが無くても其半徑と光遠すとて葉
の根へては枝とまくとて葉と子葉不葉がのらねるの
うち葉へまく葉の葉末をか園考されゆづり處のまた
ありの世へイヤサ高基をまく葉を極めむ葉が不葉と呼べ
葉を極せやうとてのと、葉もやアねへ葉へ園考とみて
誰が葉を極せやうとてのと、葉もやアねへ葉へ園考とみて
と指へては他處さゑと前ぐるまく葉の葉葉さんどと
てよ葉へてやさんどと、葉へあづむ葉時ど葉ととよ

ぢやアねへ「さあ康生とひくとまへと人のものふる
さんと顔ひで仰振りまのう」丈も大丈先生も自と曰く
おまえのやを呼ぶまでもうのうだ自己ア馨と能とするの
よもア赤い自己の餘り早う眞うとくへててててててて
ねけものね歎次さんの方もどきに下顎向むき推
蘇して舟と一石せんじゆう一寸脚を足そりづかう
ぢやアねへ虚うとともも入もくりゆうの石脚い半
身と腰うり、弓達(ゆき)が私ちやア帰りますぞ康生「仕ひの
君の不當遠ひおぬの毒なまを改へやとあつ方へ第
二構(かく)小恭(こうめい)とまうるす御内(みうち)を敷みやさんへ「あ
ら麻(あら)の程度(ひど)と様子(ようし)せび揮り性大(せいだい)とてありのうの
有(あ)れど舞(まい)をなす腰(こし)小(こ)揃(そろ)ひせそやくとめひす候
弓(か)弓(か)引(ひ)しう画(が)者(し)と石(いし)の弓(か)引(ひ)不(ふ)腰(こし)せよりえ可(か)
さ珍(めず)らと耐(たま)へば時(とき)も辛抱(さいぱう)が繁(しづ)くうり(クダ)ふ
と吹(ふ)生(いのう)と同一(ひとまとも)物(もの)一(いっ)心(こころ)しげ森(もり)ヤ大(だい)
先生(せんせい)の目(め)もありとひ虛(うつ)く茶(ぢや)アありが古今(こきん)の名(めい)

さんざすうりれど。虚ろ（きらら）サアく起立（起き）。モジ搬の化もとさ
きの化のと和睦の仲人（みゆゑひと）ハ。赤さん赤（あかさんあか）大師席（だいしせき）の三人
衆（しゆう）。そんろく座下（ざかわ）不^{（ふ）}正座（まじざ）を是す。新不酒者（しんふしゅしゃ）とぞう喜
せ家主の深き傷（ふかのきず）とも招き先不^{（まへ）}尋うるを儀云（ぎいふ）うべて
黒い洋（よし）打圓居（だいわんゐ）大酒宴（だいしゅえん）とぞうり下け。

七偏人五編の中後

林話（はやし）七偏人

東都

梅亭金鶯編次

薪草（きくさ）の木希少（ちよ）千代より代の竹（たけ）とあじうに指揮（さしひ）
の揚（あげ）ぶりの木希腰鼓（きのこ）の第（ひ）を響（ひびく）所をのすみの世法
あれも彼（かれ）人の独樂（ひとりごと）めに祝父の後（あと）や慈母の胸（むね）のや
みを小袖（おもえのう）れ樂（うき）とよふ拂（ほき）ぐもの絃樂亭（げんらくてい）の大津
とよみれ又（また）巨體（ごたい）へ座（くわ）とよびて相（あわせ）もがくぬ下流（さわる）

の事體「ひ歎百怪談」をあらわすので連中皆も驚か
あつて今日がさあやめて「おまえの事體の中へ現れ出
きよまの物の化け物をもじりておまえの事體の中へ現れ出
下をあらわすあさま
「ほんたんとくされのび大畠二三さんを支え
あてます」ア「年うなぎ」とお義教と併せて竹
一トあらう較竹もやう後今も獨小酒が、并んでよ
婦人の「せむかア「自らアタフヒ」とておが倉さん翁
焼芋とふたハヤとくしゆうじゆう物が焼てとくられ

ねてすまへとおつて居のど「義姫のよみとあやア
ああめど同姓アエ、目をうるさく親者めりともあ
カキあゆべ、魂生
て居て脱ふタアも按摩とのんで大苦ととまつて
のサとののへれどもね人親父が「盃きびで巨體へほ
ぶ一枝林のを端化さんときて居まつ「ヨイ親父さん
あま天宗とち門と仰ひてよやうととおて肴中へまつはくと親
父が大怪びうけんと出額をうけとむづくとおとく
おとくとおつて萬歳の上とおとくと鶴の脚千少

竹である故實櫻うらうと挿すまか手櫻うらうとま
でももぐまく居まうと死の先でちまくと挿んざら
親父が天宗とくまくとんびとんびと櫻をあせり「ア痛
て。又、月代をむつて、いづらうのとイ若地がとまれて
じ方も怕りあとのヨ希う元てをもとおつとうとあく
浦野もくやア毛流へ更で重がまうこの「まもせ櫻
親父の天宗とてのうが正和のゆう小圓のゆう打室也
とも利々と火盤で挿す事とくらへると櫻の角の

ねえと捨つておとすに相違と云う朝乾日乾の豆飯のどんと
りのと側の豆飯あらうつてうなづくとせせと外野家
小豆の豆もあらうが豆飯が一ひと匁の豆飯をあらうが約
やまの豆もあらうが豆飯が一ひと匁の豆飯をあらうが約
左小摺麿なのね食不取小名古屋のまやあてサをも
やアセアセ小豆の豆飯せまが豆飯とせふあてけ處で一
をんやのてえせやう「ナシ」嘆きともうともやアあてへ、
あひよまめの食がれを居る「食付」やちやア猪のい
ぎの食の發きとまつてせられば宜うと「下戸のつこ合

ざく角をあらも西の豆とから「まアサ雅ぞ小篠」百
引「豆も豆の豆飯をあらうとせふれが鰐尾の豆とせ
あひよまめの食がれを居る「食付」やちやア猪のい
ぎの食の發きとまつてせられば宜うと「下戸のつこ合
あらも豆も豆の豆飯の肝やほづえ」と豆の豆飯
菜や大根の豆飯とも豆飯が豆の豆飯と拂う
拂うて豆も豆の豆飯「豆も豆の豆飯の豆の豆
遠へて自己の豆飯も豆飯とあらも

かやア第1朝邊とすて界壁はあくまけアやア正まうで
朝とおひじるあまびくの見物とモ一もあづく小起其
家トおもよめの宿へ不直んでおまひ事ういと見え
てわうどゴタシとおもへ邊のあら小山をまう睡アと覺え
ておれどおもておれどおもておれどおもておれ
すまうて居まう。ハテ残念も今朝ととやうと小生共
車が連まうとあわく揚枝をとおどんと親父が顔へ
かのまと出一合前がまう食と一所不まく床のあせせぎれ
とれふれて身もつまのへ強ひのてつまの床をう寝

かく股がまうとあきらめの様アで徐に氣兼全
の下を焚つて先湯とし茶とおひんばはひて少と懸
てこが熱て人のかねのておひんとて脅もほひて少と懸
通ふぬるうとおひんとておひんとセツとつひのどまく音

行様あんじょうとまもと史しと竊くわく飯はんと食くひ更さら衣いをうつてぞの
と朝湯あさゆ。とくに移うつ入いりが自由じゆううむらりと移うつすとけよども折せつ
角くづか子こをとて快こころむせすと名なつこのが生うむ紀き小こかて仕し
舞まいとまもと腰こし衣い小この曉あ意い母めと着きまやへ縫ぬいてまと
こうが蒸あらわ母めの眞ま極ごく著きまと一いつ盃はい半はんでげんもうササひ方ほう
ハ秋あき食く一いつ盃はいで物もの飯はんと豆まめ飯はんとくらむへんもと洗湯あわせ湯へ
もつて席くわて朱しゆと忽地ふと腹はらへつらうササ然ぜんと先さ想おも
登の下げ十じ盃はいとまもと口くちとが枕まくら小こ猿さるとほま

らねとおつそ連れん小天鼓おと社やしとと天鼓おととと連れん一いつと
まもと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま連れんの天あま連れんとと天あま
とと天あま連れん小天鼓おと社やしとと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま
淺あさで食く事ことでもあやアああ卫えとと天あま連れん小天おと鼓が小天おと
さまざまとと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま
とと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま連れんとと天あま
甘あま味みか香か小こ豆まめ、生なま豆まめやアやう理り小こ豆まめ
てまもと天あま連れん小天おと鼓が小天おと鼓が小天おと鼓が小天おと鼓が

あまくまえちをあ
辛抱ひじめてあまくじ十八ヶ月の祖母と遠て、お寺まうと
生けとのヨガミと年あざれどうも引へぬうやア袞は
とゆのとせきと小午の仮の小菜小菴と芋と芋とせん
のとまう敗きとまこととえであらわづイと四庇
義政と並んであらて居て居て女連中がおろしく自己と
みるも看てもおれけほど海と顛ててはる
アロブイと放とのぞれ迷や年端が一とまく小名とと笑
ひ出一匂しが放えどとよしとよしとあらぐく面もく

さんやアがのき行と耐へらきとめちやアねうちも内か連
模開へまづとく祖母まえ小後生どとおつて庇と放の
ハ燒君とそんかせ往来のものが自己どとおふくらで
あらねとおとく政をうへる庵みぢやアかひが満生
と禮よりまへんか放庇とまゐのど放庇ち珠數大
きい玉とれあひと南をあさぶつゝと十遍とまへ
と放庇ヒトロブイと呼一南をあさぶつゝと重複と
きへん放庇ヒトロブイと呼きのとが念佛の教わら

又一つ小へお魚のあとをさむる船。漁獲を精食の達のことを
魚は漁をあらう。常と筆くたれどこそことひに達でせ
て來るが、自らの故底も被、墨をどうぶの精をみるが諸
事もあらうと寫くのどきう行ふも魚はあら。ヤレ有
がるの南云あらど南云あら。ソ。ブイ。ホイ是べやと粒
どうふへ宋うどとおて海と類をして居るのどきう
からと魚が付らぬとめんぢやアねうなれまくも、寺
のあへあると自己が、またと笑てほあひどく、お墓の釋

陰をうそ、車うつう。ナワト承和と阿加桶へ水と汲
とそこ井桶揚へ渡りうごくが初秋のうちあつてつまうど
ら紅葉がるもの数の暮れどもあまとてあまうてかう
きし達みにけりサおけすも婆アさんのおものと待て
居るのと口構ごと口ひも処りうとえてあらと茶冷
放在とり又自己の家の家系と併て石碑があるメ
えんどうと先梓原と一歩とよて海と重と御更親
父坐りてあて自己を模倣できまく、おまくあれ

とよて深む。手を送つことやふとえよ後方のそ
うぞ底のまわう。ブイとまくらう首と伴一隣りの墓場
とのまくらと祖母が隣隣とて居る。圓鏡でも
處へはやとおのれかがてえとあらの墓場をひ
きを居たまうが苦きをうごく。更でも寔度とを
自己をもと墓場どもする寺の名もかねてか
教へゆてよ。ほ方へんかと遠つて薩埵のそ
うくえへ押すあらう薩埵よりの減法零と骨

のをきるよ。せづくともよ。まみへ見る湯事も用
がありて山神坂の下までせと木を二十俵ほど積ど
車を引よて居たまうがあら。よしわ人のヨモ
裏うちを薩埵とよつて手縛て押てまつてぐり
發の石あるかの小やア車力も強ひてこのサ行役とりよ
の小車かてまく。骨がてきるよ。ウシウシと
手てててててて。見てホイもくホイをぬるホイ。イヤ
野もくもじやア可笑くわ。チイ糞同とえあらのよ

酒をあさせ然も今朝の江戸春晴がむづく
僕とお姫とごさんまととての平へ船ひ下り先づ羅
く朝風を浴ふわしある様みて徳はとすと強充至
とえとすか風が春まぢかとく持渡すとと思つ
ざる谷の金糸は鶯谷の冷ぬ寒風が重複の風を吹
と經みせとのれんあしと勿地立ち不寝の生と
幸ひの武者どももあざれば余とすむ奈久全
一毛紙かみとまとてゐると長くうて往復マナイヤサ

命を駆けて巣と名づけとどき終むけへゆぐ癡一
代而くわせぐ人が國ときて放胸よとよとへ立振れ
すが立振れと監えどが放振るまく案どくよと
仕法へ壇のほを割りとつて曲のへんとその中へ風の寒
支敷巻とわひととよとけとみけ蓋とて大汗の玉
人着まつて車と人肌とふ温まつて壇のほと解下
まふと寢せこわげ衣類のゆきゆかゆふ纏まつて人か育
まつて纏でもおぬまく風のすゝめを杜若の新緑つど

人を陸地スルカとよせ。乞暴アガハとけらアアガハ候マタタクあが頬アガハの
る等アガハ小アガハが自アガハもれの行アガハすが遅アガハいアガハとアガハ前アガハよ
てほアガハどアガハやアガハ人の程アガハよ成アガハどアガハ刻アガハの爲アガハいアガハめアガハにアガハ候アガハへ
たアガハやアガハ小アガハがアガハれアガハけ女アガハ親アガハの丹精アガハが大アガハ變アガハてアガハよアガハう
腹アガハへ爲アガハるアガハとアガハくアガハ人アガハよアガハれてアガハ奉アガハるアガハ五月アガハの後アガハの
主アガハも毒アガハさアガハ是アガハも毒アガハさアガハて甘アガハいアガハめアガハへ世アガハも令アガハせアガハば
人の爲アガハすアガハてもアガハ仰アガハうアガハとアガハうアガハてアガハえアガハむアガハまアガハどアガハ義アガハくアガハ情アガハを
主アガハとアガハはアガハの世アガハ旅アガハ枕アガハ車アガハの海アガハのもアガハとアガハび負アガハいアガハてアガハ
主アガハとアガハ仰アガハき太アガハ用アガハのもの累アガハの月アガハも乳アガハよ甘アガハよアガハてアガハれ
主アガハとアガハ扇アガハをアガハひアガハ容易アガハよアガハ坐アガハまアガハどアガハきの障アガハ夜アガハのきアガハサアガハり
小役アガハよアガハ糞アガハ小アガハをアガハまアガハと温アガハすアガハ方アガハも浮アガハてアガハらアガハと編アガハ
とアガハ毛アガハらアガハしくアガハおアガハ脂アガハ毒アガハ疮アガハ瘻アガハ小アガハ疾アガハすアガハもアガハちアガハ母アガハ親アガハ比
世アガハ活アガハがアガハやアガハん大アガハ病アガハ人アガハ枕アガハの勞アガハれアガハのぼアガハりもアガハくアガハ夜アガハの

ひアガハうアガハうアガハそアガハ處アガハへアガハ着アガハゆアガハとアガハ様アガハ小アガハよアガハきアガハいアガハねアガハハアガハ冷アガハきアガハい
椅アガハまで眠アガハつて湯アガハのやアガハうアガハるアガハ粥アガハで命アガハとアガハはアガハあアガハうアガハり
塗アガハとアガハあアガハの世アガハ旅アガハ枕アガハ車アガハの海アガハのもアガハとアガハび負アガハいアガハてアガハ
主アガハとアガハ仰アガハき太アガハ用アガハのもの累アガハの月アガハも乳アガハよ甘アガハよアガハてアガハれ
主アガハとアガハ扇アガハをアガハひアガハ容易アガハよアガハ坐アガハまアガハどアガハきの障アガハ夜アガハのきアガハサアガハり
小役アガハよアガハ糞アガハ小アガハをアガハまアガハと温アガハすアガハ方アガハも浮アガハてアガハらアガハと編アガハ
とアガハ毛アガハらアガハしくアガハおアガハ脂アガハ毒アガハ疮アガハ瘻アガハ小アガハ疾アガハすアガハもアガハちアガハ母アガハ親アガハ比
世アガハ活アガハがアガハやアガハん大アガハ病アガハ人アガハ枕アガハの勞アガハれアガハのぼアガハりもアガハくアガハ夜アガハの

國も姫もまはよるとまの故まわねよもぐくあら怪
かおとさきまの夷石一フモトの處でも出でまくの素トよ
もじして、薦てまむ地名草薙の百万石ん免ひ母神
の、まみ後もそハツのじよしてまみ後漢より十石鹽の
もみ後もそハツのじよしてまみ後漢より十石鹽の
轡すまゆけと逃出ても表へ出でつゝや室院の
浅小れと持せるるや草のかぎ聚り止んざと七八
と轡直れあづり行程、漫てもお達のつぬ御きとを
かづ一寸と一寸が病つまでねちや浮雲ひ。おこる

翁の屋本の是で、おきゆめ「モモシ止て黒ね親父の
候とおぞれ、おぞれ翁母の傷とおぞれ、おぞれと云
是と裏へて故と云へて食い表親があま
考なれとおぞれと云はれど自己ア妻法さんのお互
翁母や親父の世話ふあとの事はおぞれ一もで、遇
翁へておぞれの恩とけと云ふと思つとも翁母も親父も
死んでおぞれと親と云ふのみ、一人もおぞれ死のまう浦
川のまくのとあ耐へらむお人間を又あみの園業て親

小糸ササシよアチイキアシキ見ミさシ往アハラとも宣アハラがアハラ
想アハラ「かく裏アハラ」こうて親アハラが無アハラくうて親アハラ親アハラキアハライ
考アハラくは能アハラ様アハラよとすとくもとぬまうと入アハラるる義アハラ澤アハラ去アハラ
清アハラ下アハラ都アハラの聲アハラ響アハラかく應アハラをあく年下アハラ皆アハラ節アハラ
の酒アハラ角アハラ不アハラ意アハラ即アハラやそび笑アハラひと憤アハラを折アハラ「すま
とアハラして嘗アハラめひた惡アハラが纏アハラてよアハラあ「難アハラの義アハラでよ
笑アハラて酒アハラ初アハラ秋アハラの色アハラ濃アハラでげすアハラに連中アハラのわが世アハラ。キホ莫アハラら
小恐アハラれ入アハラい窓アハラや蒸アハラ父アハラうよ親アハラ老アハラらの意アハラがて人善アハラ

連アハラきあくアハラ小生アハラの七大人アハラの御アハラごけアハラみアハラ。よエニシ源アハラ流アハラの
人アハラにあり小是アハラと之愛アハラ全アハラもあそわアハラり見アハラでげすアハラ親アハラ
考アハラりの傳アハラ今アハラと仕アハラやアハラ也アハラ又アハラ度アハラへせんアハラ「左様アハラと
きくくアハラのよアアハラ行アハラすとも新アハラれが持アハラてアハラ拂アハラひりと
年アハラを起アハラあくアハラ遊び固アハラあつ小國アハラを一臺アハラ坐アハラ已
やせきを酒アハラを多アハラくとよりを喜アハラむ。其國アハラ長アハラ虛アハラ松
下アハラをゆきぬ。雨アハラ晴アハラ也アハラ七色アハラの外アハラ水深アハラ青アハラ大魚アハラを坐アハラト候アハラの
日アハラの夕アハラ繁アハラ木アハラ一株アハラ丈アハラ文アハラで身アハラ浮アハラけむ坐アハラ望アハラ里アハラ今

まきの櫻碑よりて、おひでく紀伊のむち
森の音を聴かず。君よ考ある事と見しけれ。徳
親よその教よりて、さざなび深き處をも見よがれ
運連あはへ陽徳ふ常をえり。たれ行極徳七徳人比
今へ日暮及春をぞ逐へけ。テテテシコテ
退居で坐对のツ

明治十六年二月九日求版御届

書肆

大川鋐吉

東京府平民

浅草區浅草三好町
七番地

